

2013年8月3日 大阪国語教育アセンブリー（於：大阪府立今宮高等学校）

第5分科会 表現の発見—表現活動とICT

発表者：梶井 英人 先生

記録者：澤野 美智子

●発表の要旨

（参加者が各自で、端末を操作し、用意されたリンク先の資料等を参照しながら、発表を聞いたり、質問・意見交換をした。）

昨年度、大阪府立生野高校3年生の選択授業として行った国語表現。この授業では「自分なりの問いを持って卒業してもらうこと」が目標であった。

生野高校の生徒だから教師側からの強い動機づけが必要ないのではないかという意見がフロアから出たが、進学校だからといって必要ないとは限らない。どこに火をつけるかが勝負どころである。国語表現の同じ課題を工業高校でもやってみたが、有効な火のつけどころを与えることによって火はつく。これは偏差値とは関係のないことだ。

1年間の流れとしては、まず頭と心を柔らかくするという事で、ゲーム性のある授業を行った（①「名前当てゲーム」、②「私を漢字であらわすと」）。次に、石仏の写真を見せて、石仏がしゃべったら何を言っているかを考えさせた（③「なんていってる？」）。これは他の高校でも行ったが、それぞれに異なる特徴が出る。これをするだけで教室の雰囲気が変わる。村上春樹の比喻表現と競うという試みも行った（④「原作と勝負」）。

これら授業では、ものを書く上での一助となるよう、場所をわざと常に移動していた。その試みの一つが、学校近くの商店街に出て書くというものであった（⑤「路上観察学」）。

またチームごとに、自分たちが普段使っている言葉の定義を考えるとという試みも行った（⑥「新常用漢字で世界を創る」）。さらには自分の未来、あるべき社会の姿を言葉で構築するという作業を行った（⑦「しあわせプロジェクト」、⑧「私たちの用語集」、⑨「私たちの教室」）。

生徒たちはあまり原稿用紙を使わず、お気に入りの「マイ端末」に入って書く場面が多かった。特に卒業作品などの長い作品はそうであった（卒業作品の製作期間は1ヶ月半ほどかかり、授業時間だけでなく放課後も使わないとできない）。「マイ端末」で書くことの安心感というのはあるだろう。また、後から直せることから、書くことへのハードルは低くなる。同じフォルダに作品を残していくので、他の生徒がどこまで何を書いているのかを見たり、意見を交わしたりできる点は、大きな長所である。

生徒の作品は学校のホームページで公開した。そのため生徒たちも、誰か一般者に見られるという意識を持ちながら書くこととなり、この意識が書くことへの姿勢を変えていった。

授業では、閲覧者限定のブログも活用した。これは生徒たちが帰宅してからも思考を継続するための手段となった。生徒も自由に書き込むことができた。生徒間の交流が見えるというのは大きい。また、過程が全部残るのは、リスクもあるが、意味のあることである。学校内だけで閲覧できる掲示板も、お互いの作品を読んだ感想を即座に書きあう場として役立った。

国語表現に限らず、自然科学などの他分野でも、このような手段を使ってまとめるのが有功かもしれない。LAN教室など、配備されているネットワーク環境を活用する方法を探るべきだ。パソコン自体は冷たい機械であるが、使い方をきちんとすれば温かいものになる。

ただし媒体に依存しすぎるのはよくないであろう。手段はいろいろあっても、それらを使うために何かしようというのではなく、ある目的のための手段として利用するという意識が重要だ。

「国語力」とは、自分なりの問いを言葉でつかみ、他人とつながる力のことである。表現しないと国語教育は終わらない。